



第22号 2018.1.1発行
 発行者：株式会社協進印刷
 編集者：JO編集委員会

たくさんのお大人と出会う場が 自己肯定感を育んでくれます

子どもの未来サポートオフィス 米田佐知子さん



子ども・子育て支援に取り組む多様な組織をサポートする「子どもの未来サポートオフィス」代表。東京家政大学・関東学院大学非常勤講師。広がり、こども食堂の輪！推進委員会委員、横浜こども食堂ネットワーク準備会、横浜コミュニケーションカフェネットワーク世話人、かながわ生徒・若者支援センター運営委員など。
 子どもの未来サポートオフィス <http://kodomonihai-so.com/>

江森：私が米田さんに初めてお目にかかったのは、横浜型地域貢献企業の集まりでNPOの皆さんと交流する企画があり、米田さんに「神奈川子ども未来ファンド」の事務局長として参加していただいたときだったと思います。現在はフリーランスとして講演活動などをされていますが、このような活動に関わったきっかけはなんだったのでしょうか。

ました。今でいうNPO支援センターのしりでしたが、当時はまだNPOという言葉も知られていない時代でした。
江森：子ども支援の活動にはどのように関わったのですか。

なっていますが、当時からすでにそういう問題はあったのですね。
米田：横浜も転入者が多いですが、全国的に見ても自分の生まれ育ったところではない環境で「アウェイ育児」をする人は全体の7割に達すると言われています。そういう環境で本音をさらけ出して周りの人と付き合うのはなかなか難しいことですが、ちょうどその頃、文京区音羽で「春奈ちゃん事件」が起きました。お母さん同士のトラブルから相手の娘の春奈ちゃんを殺害してしまつたという事件でしたが、それがとても他人事とは思えなくて、明日にも自分の身に起こるのではないかという危機感があつて、そのことについて話そうと呼びかけたらずい反響がありました。

がありましたね(笑)。いつ頃から言われるようになったのでしょうか。
米田：「1・57ショック」といって1989年に合計特殊出生率が過去最低になつたのです。これによって本格的に少子化対策が始まりました。私自身の経験を振り返つても、当時は子育て中の親子に限らず、障害のある人とか、高齢者の介護をしている人とか、いろいろな問題を抱えているだろうと思われる人が気軽に立ち寄れる場所がまちの中に少なく、社会的なハンデを背負つていても集える場が欲しいと思つていました。

米田：社会的な問題に関わるようになった出発点は、学生のとときにアジアの南北格差の問題に関わつたことなのですが、就職してからもアフター5でNGOの活動に参加したり、休暇をとってフィリピンのスラムに行ったりと、当時としては変わり種のOLでした。その後ボランティア活動で知り合つたいまのパートナーと結婚することになつて大阪から横浜に来て「まちづくり情報センターかながわ」というところに勤め

米田：私自身が1人目の子の出産・育児をしたときに、近くにまったく助けられない人がいないという状態になつてしまい、それをなんとかしたくて「子どもを連れていても暮らしやすいまちにしたい」というテーマで横浜市の市民協働事業に企画提案したところ、運良く採用されたのです。当時はまちづくりをするときに、子育て中のお母さんの声を聴くなんてことはほとんどありませんでしたし、親子の物理的な居場所も精神的な居場所もありませんでしたので、ある意味画期的なことだつたと思います。

江森：今でこそ「密室育児」などという言葉もできて、親子の居場所のなさが問題に

そういう活動から、子どもの居場所づくりの支援が「神奈川子ども未来ファンド構想」参加につながり、多世代のいろいろな人が混じり合う場づくりの活動が「コミュニケーションカフェ」につながっていきま

ました。今でいうNPO支援センターのしりでしたが、当時はまだNPOという言葉も知られていない時代でした。
江森：子ども支援の活動にはどのように関わったのですか。

なっていますが、当時からすでにそういう問題はあったのですね。
米田：横浜も転入者が多いですが、全国的に見ても自分の生まれ育ったところではない環境で「アウェイ育児」をする人は全体の7割に達すると言われています。そういう環境で本音をさらけ出して周りの人と付き合うのはなかなか難しいことですが、ちょうどその頃、文京区音羽で「春奈ちゃん事件」が起きました。お母さん同士のトラブルから相手の娘の春奈ちゃんを殺害してしまつたという事件でしたが、それがとても他人事とは思えなくて、明日にも自分の身に起こるのではないかという危機感があつて、そのことについて話そうと呼びかけたらずい反響がありました。

江森：今でこそ「密室育児」などという言葉もできて、親子の居場所のなさが問題に

そういう活動から、子どもの居場所づくりの支援が「神奈川子ども未来ファンド構想」参加につながり、多世代のいろいろな人が混じり合う場づくりの活動が「コミュニケーションカフェ」につながっていきま



米田…いまはフリーランスとして、子ども支援の活動への助言や、企業が運営する子ども支援活動助成プログラムのサポートなどを通して、子ども未来ファンド時代にお預かりしたみなさんのご縁や、寄付と一緒にいただいたみなさんのご縁や、寄付と一緒に

お預かりしたみなさんの「思い」を社会に還元するつもりで活動しています。子ども支援も最近では居場所づくりも含めたまちづくりと密接に関わるようになってきて、子ども支援×まちづくり×居場所（コミュニティカフェ）が掛け合わさったのが「子ども食堂」ですから、これまでの延長と違って関わっています。NPOが運営する居場所はテーマ型なのですが、子ども食堂は地域の中で地域の人たちが運営するという意味で、また新しい可能性が拓けてきたと思います。子どもたちの課題もテーマと地域に切り分けられなくなってきていますし、これからはNPOと地域の子ども食堂がお互いのリソースを活用しながら、子どもたち

を面で支えていければよいと思っています。す。

江森…現在の子どもを取り巻く状況は少しは改善しているのでしょうか、それとも一層厳しくなっているのでしょうか。

米田…厳しくなっていますね。よくお話しするのは自己肯定感が低いということ、15〜24歳の人が亡くなる理由の第一位が自死であるということです。これは子どもたちが「自分なんて生きていてもしかたがない」と諦めてしまっているということであり、それは大人と社会が子どもから諦められてしまっているということでもあると思います。そうさせないためには、子どもが小さいうちに、親と学校の先生以外のたくさんの方と出会う場を作ることです。そうすることで、人にはいろいろな生き方があるということを知ることにもなるし、逃げ場になり得る居場所ができるのだと思います。

江森…そういう機会がなくなってしまった背景には何があるのでしょうか。

米田…そもそも大人が関係を切ってしまったという部分ですね。プライバシーを守りたいから、自分のことはオープンにせずに、有料のサービスでまかなっていくわけです。そうやって関係を切ってしまった親と暮らしている子どもは、社会的相続というかたちで親の近所付き合いとか価値観を受け継ぎますから、社会的なつながりの薄い子どもになります。そうやって本当の自分をわかってくれる人、自分を認めてくれる人がどこにもいないという状態になってしまっているのだと思います。

江森…もはやそれは一部の条件の整っていない家庭の問題ではなく、すべての家庭に

共通していえることですね。

米田…ですからもう一度つながり直すことが必要なのです。でも昔のような関係に戻すのは無理ですので、ゆる〜い出入り自由な関係をいくつも持っているということが、大人にも子どもにもセーフティネットになる時代なのではないかと思えます。親が「知らない人から声をかけられたら逃げなさい」と、子どもと地域の大人の関係を切ってしまうからです。子どもの居場所も一か所だけでなく複数か所必要ですし、安心して話せる大人はたくさんいた方がいいのです。

江森…今日もうひとつお聞きしたいのはNPOの今後ということなのですが、いま話してきたような社会課題については、これまでNPOが担ってきたわけですが、企業のコスト競争が限界になってきたときに、事業化可能な社会課題解決に企業が進出して市場化してくる可能性があります。NPOの役割も変わってくるのではないのでしょうか。

米田…受益者がコスト負担できる事業性のある取り組みについては、担い手が誰である収益事業としていけば良いと思えますが、やはり地域には声があげられないとか、誰も気づかない新しい課題が生まれてくるので、そこにいち早く気づいて、そのことを社会に向けて発信をし、解決策を提案していくというのは、それがまさにNPOの本来的役割だと思えますし、これからは手放してはいけないと思えます。そしてそれができるからこそ、企業が社会課題に取り組もうとしたときに、NPOが専門的な立場

で手を重ねることができるようになります。江森…確かに企業の立場からすると、NPO

Oの人たちには、会ったときに何らかの刺激をもらえるような存在であって欲しいと思いますね。

米田…そこで注意しなければならぬのは、とかく新しい課題に取り組んだり、改善されていくことを数値で表現したりすることが求められる世の中ですが、今よりも悪くならない現状維持の取り組みにも大きな価値があるということです。そういう地道な取り組みを社会全体で応援するという気運を作っていくかないと、変化という成果を上手く表現できるNPOだけに資源が集中してしまつて、小さなNPOが淘汰されてしまつていくのではないかと危惧をもっています。補助金が出ていこうちはよかったです。補助金が切れたら大手のNPOが引き上げてしまい、結局地域に何も残らなかつたということは避けたいですね。それには地域の人たちがこの地域のためにどんな活動が必要で、そのために何を応援していくのかということを見る目を持ちたいですし、それを育む場が必要です。実はコミュニティカフェはそういう場になれる可能性を持っていると考えています。

江森…今後はどんな活動をされるのですか。米田…子どもたちが明日に夢を持ち、自分を信じて生きていけるように、これまで私がいただいたご縁や知恵をわかちあい、力を合わせていきたいです。それぞれが単独でできることには限界があります。これからはリスクを恐れて閉じてしまうのではなく、個人もNPOも企業も開いていく時代だと思つたので、開いたみなさんを繋ぐことでお役に立てればうれしいです。

撮影協力：港南台タウンカフェ
http://www.towncafe.jp/kounandai/



オンガクに、ありがとう

竹見正一



Primal Scream "Sonic Flower Groove"

長いお経が終わっても、まだまだ続くおおっさんのお説教。ご近所さんはいじりながら、爆笑の渦をつくっている。おかんのほうのおじいは亡くなって7週間、毎週金曜日にこの渦の中でじっとしている。悲しさが摩滅するほど、おおっさん話はくだらなく長い。ただ今日は昨日のことを思い出すと嬉しくなって、全く苦痛ではないのだ。そう、昨日のこと…

喫茶店を出て師走の大通りを東へと向かう。通り沿いの商店はどこも大賑わい。アーケードに垂れ下がった錆び錆びのスピーカーから漏れるクリスマスソングのインストにまぎれて、電気屋から高音質の“怪盗ルビイ”が聴こえる。店番のおばあがうたた寝をしているタバコ屋から“パラダイス銀河”、ツタで覆われた中華屋の厨房から“みんなのうた”。そういえば、ぜんぜん演歌が聞こえないなあと思ひながら、ウォークマンのスイッチを入れる。1年越しで手に入れた“ソニックフラワーグルーヴ”。12弦がきらめきまくってる！今日はドルビー外してシャリシャリにしてみよう。すれ違う人々が皆幸せそうに見えてきた。良い感じだ。歩みのピッチを上げる。川を渡る。橋の真ん中に立つ。うわ！北の山にも雲がない。ここではなかなか見ることのない晴れ渡る空。ヤシカのT-2を鞆から取り出し、ファインダーを覗く。35/F3.5テッサーレンズの先は、更に遠くなったアオゾラが輝く。よし、ボビーがDon't walk awayと奏でたら、シャッターをきろう。カチャ。あかんあかん、急がな。ボリュームを上げ、先を急ぐ。橋を渡りきり、四つ角を南に下がり、大学の門を抜け、階段を駆け上がる。開講1分前、このくらいがちょうど良い。するするっと後ろの真ん中の席に潜り込む。開講。ぐいぐい引き込まれるT教授の講義。興奮が続く。独歩の竹の木戸にはじまり、スコセッシン、ニューエストモデルと展開してゆく。リクルート、原節子、千代の富士、浅田彰、タモリ、そして川端の雨傘を読み上げたあと、想像力をつけなさい、あなたたちは大きな勘違いにいる世代だから、と声を枯らして閉講した。ぼくはもちろんわかってる。彼の講義の半分も理解できていないことを。でも、ここに通っている。ただただ心が熱くなるから。きっと来週もここに来るだろう。教授に押し寄せる多くの大学生を尻目に、ぼくはそっと席を離れた。階段を下り、棟をでて、枯れた木々の間から空を見上げる。いまだ雲一つ無い青空。このアオ良い！カチャ。ファインダーから目を離そうとしたそのとき、「なんかおるんか、そこに」と、間近にどこかで聞いたような籠った声が。うわ！M教授やん！あかん、なんも言えん！なんも出えん！ほんの数秒、同じ空を見上げて、M教授は去って行った。著書のおかげで救われました、くらのことも言えなかった。

お説教が終わり、おとんのセダンに乗り、海みたいな湖を横目に家路につく。後部座席のおかんと妹は、明日のナントカ会の準備で大変そうだ。AMラジオのフォークルが、美しいメロディーで車内を暖めてくれる。“悲しくて悲しくて、とてもやりきれない”。昨日まで悲痛を感じていた曲が、愛おしくなる。思えば会えるし、思えば届く。たとえ勘違いでも、たとえ会えなくとも、思いは枯れぬ。いつかボビーにさえ会えそうな気がする。「なんかおるんか、そこに」。あれは、稚拙で危ういぼくへの忠告だったのかな。空に向けてファインダーを覗くモヒカンのぼくに、そこだけやないよ、と、言ってくれたのかな。未来ってぜんぜん悪くないやん、と、自分勝手に盛り上がっているぼくがいる。空についてのただこれだけのことで。

人は死ぬ。死ぬのだから生がある。目一杯やってみよう。高校を卒業する理由ができた。

こども食堂とは「子どもが1人でも来られる場所で、地域の人が無料や低額で食事を提供している」活動です。2012年に大田区で始まり全国に広がって、現在は2千か所近くあるとも言われています。メディアで子ども食堂を知り、自分の地域でも始めようと発意した個人がボランティアを募って運営団体を立ちあげたり、事業者が始めるケースなど、それまで子ども支援の活動に関わりのなかった人たちが始めているのが特徴です。開催場所は、公共施設や町内会館、お寺・教会、飲食店、高齢者デイサービス施設、個人宅開放など多様です。月1〜数回開催が多く、チラシなどで広報

し、規模は数名から100名超えと様々。横浜市内には、2016年1月時点で1か所だったのが、2017年7月には71か所が増えていきます。なかには多世代型の「地域食堂」も多く見られます。こども食堂が増加している背景には、近年子どもの貧困の問題が表面化していることがあげられます。2008年にOECDが初めて子どもの相対的貧困率を公表しましたが、有業のひとり親相対的貧困率において、日本が34カ国中ワースト1位になったことで、マスコミにとりあげられるなど社会問題となりました。国会では2013年6月に「子どもの貧困対策の推進に関する

法律」が全会一致で成立し、本格的な対策が始まっています。このように社会的な関心が高まる中、身近なリソースを活用して始められるこども食堂ですが、最近では貧困対策ばかりがクローズアップされてしまい、こども食堂に行くだけで貧しい家の子とレッテルを貼られてしまったり、大人同士で盛り上がりすぎてしまい、子どもが利用しづらくなってしまうなどといった問題も出てきています。せっかくの善意で始めた活動が、変質してしまうことなく、子どもたちが安心して居場所として、長く地域に根付いていくて欲しいと思います。

子どもをひとりにしない、まちの居場所——「こども食堂」



横浜市旭区の「みなと食堂」での魚の解体ショー。さばいた魚で作った竜田揚げを、子どもたちは残さず食べたそうです。

てんぷら たぐさり

大口の魅力を紹介する「大口自慢」。今回ご紹介するのは、てんぷら「たぐさり」さんです。お店は、国道一号线の七島町交差点を左折し、弊



社に至る途中にあり、お店の前の「のぼり」が目印です。ガラスの引き戸を開けると、まず飛び込んでくるのは天ぷらを揚げる小気味良い音と、鼻をくすぐる香ばしい油の香り。ご主人の田鎖義男さんは職人気質で口数少なめ。曰く「つちは宣伝とかいいんだよ」と素っ気ない。でも天ぷらのことだけは、情熱たっぷりに語ってくれました。



魚介類は海老以外は冷凍は使わず、仕入れも仕込みも全てご主人自らの手仕事。「この食材にこの味は、この値段では買えないよ」と自信たっぷりです。どれどれ、大人気の天ぷら盛り合わせ（写真参照）、海老が2本に魚に野菜にかき揚げ、これでもか！と入って600円！期間限定の大粒キフライも8個500円とお買い得。天丼は冷めても美味しいと評判で、町内会等のイベントでは定番のお弁当になっています。持ち帰り専門店ですが、待ちきれない人は外のベンチでどうぞ。

大晦日には年越しそば用の海老天ぷらを予約販売。毎年1000本を超える注文があるというから驚きです！ランチに、晩のおかずに、イベントに、年越しそばにと、大口人から愛される「たぐさり」さんの、ふんわりやさしい天ぷら、いかがですか？

大口自慢

てんぷら たぐさり

横浜市神奈川区七島町12-1

電話番号：045(421)6604

営業時間：11時～16時30分

定休日：水曜日

Kyoshin TODAY

ありがとうナイト2017を開催

昨年の11月16日、4回目となるCSR報告会「ありがとうナイト2017」を無事に開催することができました。日頃からお世話になっているお客様、NPOの皆様、学校関係の皆様、協力会社の皆様など90名を超える方々にご来場いただき、楽しく深く交流することができました。最近ではご来場の方から「ハッピーシーズ（課題）」をいただく機会が増え、社会を良くするためのアイデア出しの場としても定着しつつあります。これからも有意義で楽しい「大人の交流の場」を提供してまいりますと思えます。



第3回ボウリング大会開催！

小学2年生から50歳まで総勢14名が参加して、ボウリング大会を開催しました。はるばる浜松市からの参加も含めインターン卒業生も5名が参加してくれました。この1年間で一回りも二回りも大きく成長し、いつまでもお手本でいられる会社大人でいなくては！と思わせてくれます。年に1度会うことでみんなの成長を見られることができるのはもちろんですが、私たちの成長にも欠かせないイベントのひとつになっています。



11月ありがとうの日は「寄付の教室」

日本では決して根付いていないといえない「寄付」。寄付に対する偏見や誤解を無くしようと、日本補助犬情報センター専

ブログもチェック！ <https://kyoshin-blog.com/>

務理事兼事務局長の橋爪智子さんに協力いただき、会場となった「おひさま広場」を運営している太陽任建さんと合同で「寄付の教室」を開催しました。実施後、「寄付について考え方が変わったか」というアンケートに対し、「はい」という回答が82・3%と予想を上回る結果となり、寄付について正しく理解し、お金だけでなく「社会のために自分ができること」を見つめる良い機会になりました。また、NPO+横浜型地域貢献認定企業との連携という、これまでになかった連携を実現できたことも大きな成果となりました。



校閲ガールが職業体験！

TVドラマ『校閲ガール』に憧れて、という市内私立中学生が2日間の職業体験にきました。いつものオリジナル名刺づくり、社員インタビュー＆新聞づくりに加え、今回は9月のありがとうの日で作成した「校正ルールブック」を片手に校正作業にもチャレンジ。校正記号を一生懸命書き込んで、立派な新聞が出来上がりました。これをきっかけに、印刷の仕事に興味をもってもらえたら嬉しく思います。



JO（ジェイ・オー）2018年1月号（第22号）

発行者：株式会社協進印刷

横浜市神奈川区大口仲町108番地

TEL：045（431）6611

FAX：0450（3730）6273

URL：http://www.kyoshin-pint.co.jp

